

2016年度 第1回 JSR 編集委員会 議事録

日時 平成28年4月16日 7:00-8:20

場所 幕張メッセ国際会議場 1階 会議室 103

出席：平林 茂（担当理事）、川口 善治（委員長）、青田 洋一、赤澤 努
石井 賢、伊東 学、税田和夫、高橋 寛、二階堂 琢也、長谷 斉、
長谷川 和宏、福岡 宗良 （以上、12名）

欠席：寒竹 司 （以上、1名）

2016年4月16日の段階では、平林理事はすでに理事を退いているが、次期担当理事が決定していないため、従来どおり「平林理事」と記している。次期委員会が確定するまでは、委員長やメンバー等に変更はない。

議題

1 関連学会の編集委員長報告

川口委員長が、各学会特集号の現状報告を促した。

それぞれの学会から現在の投稿数や進捗状況などが報告された。

高橋委員が、来年から編集事務局が東邦大学から山梨大学に代わるため、担当も高橋委員から山梨大の江幡先生に変更予定と発言した。

二階堂委員が、腰痛学会は学術集会と投稿締切の間に約1ヶ月しかなく、学術集会関連の投稿については毎回厳しい状況であると報告したことについて、川口委員長が学会長の選ぶ依頼論文はどのように決められているかと質問した。二階堂委員が、学会長が決めたテーマに沿って選ばれていると報告したところ、川口委員長がJSSRの学術集会発表からの依頼は、プログラムが決まった段階で査読点数が出ているのでその段階から依頼ができる状態であるが、同様にしてはどうかと提案した。

伊東委員が、昨年のインストゥルメンテーション学会号（10号）において二重投稿があったと報告した。本件については議題8で別途議論することになった。

2 今年度の企業からの広告代申し込みの最終報告

現段階でのJSR7巻の広告申し込み状況の資料が査収した。平林理事が、昨年よりは微増していると説明し例年広告費の総額が下がってきていたが、ここで下げ止まった感があると意見を述べた。

川口委員長が、数年にわたって申し込みのない企業へ電話をかけるよりも、新規に学術集会へ出展している企業へ依頼したほうが広告も集まるかもしれないと提案し、徳橋会長に許可を頂いた上で学術集会の出展企業リストが手に入るかを学術集会運営事務局へ問い合わせることになった。企業の年間予算は春に決まる場合が多いようなので、広

告申込依頼は、リストが出来上がり次第例年より早めに、実施するのが良いという意見が出た。

3 分担金に対する関連学会の考えの確認

平林理事が、3月の理事会で関連学会の分担金を現状の150万円から100万円に下げる方向で検討することについての承認を得たと報告した。

長谷川委員が最終決定かと尋ねたところ、平林理事が最終決定ではなくその方向で次期新理事会にて検討するということであると回答した。また平林理事が、今年度(2016)の分担金は変更できないので、早くても来年度からであると追加説明した。

4 第7巻5号の発刊予定状況

一同資料を確認した。

5 第8巻以降の5号の編集について

JSR 編集分室の尾島氏より、5号の投稿状況が示された。川口委員長が、従来と比較して少ないかと質問し、尾島氏が規定どおりの数量で問題ないと回答した。

6 今期のJSRの発刊の見通し

例年通りの発刊予定表が示され、一同査収した。

川口委員長が、紙媒体学会誌要不要調査の際に「不要」と回答した会員から抄録集(3号)だけほしいとの意見が聞かれたと報告したが、平林理事が3号だけの別売りや特別送付はしないことになっていると説明した。

川口委員長が、ホームページ上に電子版の学会誌が掲載されるのはいつごろかと質問し、CBR 山田氏が毎月20日ごろと回答した。学会誌の発送は毎月25日までに大日本印刷より発送されているため、発送よりも前にホームページへアップされていることになるので、紙媒体学会誌不要と回答した会員が抄録をまったく確認できないといった状況ではないことを一同理解した。

7 次期委員会への要望事項

川口委員長が、今回理事の改選があり委員会についても変更が行われる予定であるため、現委員会から次期委員会へ要望や申し送りすることがあれば発言してほしいと各委員に促した。以下のような発言があった。

青田委員：英文誌の発刊により、JSRにもよりアイデアや特徴を盛り込む必要が生じるように思う。

長谷委員：次期委員会への要望ではないが、確認として、JSSR号に掲載される原著論文と各学会特集号に掲載されるものとは同格と考えてよいか。

川口委員長：まったく同格である。そのために各学会にも採択率を JSSR 並にすることを希望している。

石井委員：若い先生方が読みたいと思うレビューや、各学会の歴史等が掲載されているとよいと思う。

二階堂委員：腰痛学会号は学術集会から投稿締切までが短期間であるため、投稿を早めにアナウンスするように申し送る。

伊東委員：最近の投稿ではケースレポートが増加しているように感じている。海外に投稿されるものも多いが、なるべく JSR へ投稿するように呼びかけたい。

高橋委員：英文誌の発刊により投稿数が下がってしまうのを懸念している。また、大学では論文適正委員会を設置し、倫理面について詳しくチェックしているが、JSR への投稿の際にはまだこの方面のチェックが緩いように感じている。たとえばケースレポートに関しても患者の同意を得ているかについて、JSR への投稿では確認していない。

青田委員：高橋委員の発言のなかの論文適正委員会チェックする論文は、東邦大学誌のみか、外部の雑誌への投稿も含めてか。

高橋委員：外部の雑誌も含めあらゆるジャーナルについて投稿前に審査されている。このようなことを JSR でも行っていったほうがよいだろうか。

長谷川委員：現状でも投稿数が減っているので、投稿規程を厳しく面倒にしすぎると、より投稿数が減ってしまうように思う。

平林理事：JSR はそこまで厳しくせずともよいように考えている。

8 二重投稿に関する報告と見解

川口委員長が、議題 1 で伊東委員が報告した昨年の JSR 掲載中に二重投稿があった問題について経緯説明を行った。

平林理事が、日本医学会で二重投稿についての要点をまとめているのでそれに則していることが必須であろうと見解を述べつつ、このたびのようなほぼ同内容(図表、n も同一) の論文投稿について全委員の意見を聞いた。

青田委員：図表と n が変えてあれば問題ない。

長谷川委員：グレーゾーンを残さないほうがよいので、たとえば n を変えるには以前の論文で提示した n の倍以上などと明確に決めておくべきではないか。

長谷委員：論文中に出展や引用論文であることなどを明記していれば、図表や n が同じでも問題ないのではないか。地方会でもよい論文が出されるケースは多いが、n 数を変えるのは容易でなく、しかしながら世界に発信すべき秀逸な論文と思われるものがある。

伊東委員：世界的な雑誌に英文で掲載したものを、日本語に翻訳して掲載するのはいかがかと考える。世界的な雑誌は日本にいても読めないわけではないはず。

長谷委員：英文で出版され世界で評価されたものを、日本語で紹介するのは悪くないと考える。

長谷川委員：オリジナリティのある論文を掲載しないと、JSR の存在価値が下がってしまうと思われ、同様の研究であればよりクオリティを高めた実証結果を載せなければならないと考える。

高橋委員：以前であれば、図表やnを変えなくても（または少しだけ図表を変える）よい風潮があったが、現状世間がうるさくなっている。国際基準に合わせておいたほうがよいと考える。

青田委員：図表やnのこともあるが、英文で「原著」論文として掲載し、その後日本語でも「原著」論文とするのはおかしいと考える。日本語で出版する際には二次投稿になるため「原著論文（オリジナル）」ではないはず。

税田委員：nの数を変更する件は、少し足す、といったレベルでよいか。要旨自体が変わらないとならないか。

平林理事：日本語から英語にする分には、日本語ですでに発表（出版）済みであることを投稿先に伝えたうえで先方の雑誌が承認すれば問題ない。問題は英語から日本語にしたときにわれわれがどのような基準を設けて二重投稿であるか否かを確定させるのである。

川口委員長：もしも JSR に英文掲載されたものをそのまま日本語に訳したものが多く掲載されるようになると、JSR のオリジナリティはなくなってしまうかもしれない。

石井委員：海外ではnを少しだけ増やして再投稿する例も多くある。ただし図表やnがまったく同一のものは認められていない。コレスポンディングオーサーがしっかり責任をもって確認する必要がある。そういう意味では、査読者はすべての論文の二重投稿をチェックすることもできないので、今回の件においても責任はないといえる。

9 英文誌創刊についての説明

川口委員長が、英文誌創刊について概略を説明した。

平林理事が、会員にも創刊を周知するために JSR にたびたび英文誌創刊についての紹介文を掲載したいと依頼し、JSR 編集分室の尾島氏が承ったと回答した。

川口委員長が、高橋和久英文誌編集委員長に次回の学術集会（秋田大学 島田会長：札幌にて）において、英文誌発刊のプロモーションもかねて教育的なシンポジウムを設けてはどうかと提案し、秋田大の宮腰先生に相談したと報告した。

長谷川委員が、学会中のパネリストにも英文誌用の論文を依頼すると良い論文が多く集まるのではないかと提案した。

10 その他

平林理事が、13日の評議員会終了とともに理事の任期が終わったため、5月の日整会総会時に新担当理事が決まり、委員についても以降順次決まるため5月の委員会までは現体制での会議となるが、以降は新体制となりメンバー構成も変わると説明した。

以上